

8 模倣の中の創意

——九州大学医学部所蔵人体模型の結紮部位表現

月 澤 美代子

順天堂大学大学院医学研究科

医史学・医の人間学研究室

技術の習得は模倣から始まる。新しい海外の技術が大挙して移入された明治初頭においては、まず「模倣」そのものが国家的な規模で奨励された。明治十年から始まる内国勸業博覧会の「有巧賞牌」の評価基準には「物産の…模造移植」がある。しかし、技術は移植先特有の状況を反映して独自の展開を遂げていく。我が国に舶載された人体模型のコピーをオリジナルと比較対照し、加えられた創意を明らかにすることにより、当該時代の医学教育の状況を異なった角度から考えてみたい。

平成八年に九州大学医学部で保存の確認された等身大の人体解剖模型に関して、第一〇三回、第一〇四回

の日本医史学会総会で紹介を行い、これが、フランスから舶載された Anzoux 制作の紙塑人体模型を模倣して国内で制作されたものであることを明らかにしてきた。今回、デジタル画像の比較検討によって、さらに次のことが明らかになった。すなわち、九大人体模型には、浅筋膜を一部切開した状態での神経、動脈、静脈の立体的な表現が行われている。これは、これまで調査を行ってきた福井市立郷土歴史博物館、Le Musée d'Histoire de la Médecine de Paris、Museum Boerhaave, Le Musée de l'Écorche d'Anatomie du Neubourg に所蔵されている Anzoux 制作のオリジナルには見られない九大人体解剖模型独自の特色である。

九大人体模型には欠失部位が多く、全体の状態を確認することはできない。しかし、残存部のうち、右上肢、右半身で計一箇所、浅筋膜を一部切開した状態での局所解剖学的表現を確認することができた。特に右上肢においては、側腕部で上腕動脈、さらには、橈骨動脈に沿って筋膜が切開され、内部の神経、動脈、静脈が連続的に表現されている。尺骨動脈でも一部、

筋膜下の表現が見られる。また、右下肢の膝窩では筋膜下の血管と神経、これに連続した筋膜上の血管・筋肉の立体的な表現が見られ、膝窩静脈と小伏在静脈との関係が明確に表現されている。

部位から考えて、こうした工夫は、結紮手技の初歩的な指導、脈拍計測部位と動脈の位置関係の指導等のために改良されたものと考えられることができる。結紮部位の表現自体は、たとえば同時代のフランスの外科手引き書での表現と比較すると稚拙である。しかし、立体的に表現されていることから、人体解剖の体験を十分に積んでいない初心者にとっても理解・把握し易く教育的効果の高いものであったことと考えられる。

明治期には、既に、使用対象によって等級分けした人体解剖模型が製作されていた。九大人体模型には、ドイツ語、ラテン語、日本語による解剖学用語を記載したラベルが付けられている。また、神経系、脈管系、筋系等に関する詳細な局所解剖学的表現が行われており、医学専門教育における使用を想定して制作されたものと思われる。

明治三年以降、東京の医学校兼病院においては、処刑人あるいは獄中病死者で引き取り人の無い者を解剖することが許され多数の解剖死体を得ることができるようになった。しかし、地方の医学校、病院等では必ずしも十分な実習遺体を得られたわけではない。一方、医学教育の場においては、実践的、かつ即戦力としての外科技法の指導が要請されており、人体解剖模型にもこうした用途に合わせて我が国独自の創意工夫が加えられたことと思われる。